

道真の詩に投影された『白氏文集』

—「水鷗」の詩をめぐつて—

焼山廣志

『菅家文章』卷二の中に「晚秋二十詠」として道真の言によれば漢詩のきまりや調子を無視して速詠を詩みた詩群（注一）があり、その一つに「水鷗」という五言律詩がある。

道真の中国の書籍からの摂取態度を知る上で一つの手掛かりらしきものが見出せる為、今回はこの詩を取り挙げ考察してみる。

171 水鷗

二

雙鷗天性静

雙鷗天性静なり

况遇得心人

況んや心を得たる人に遇はんや

逐歩高低至

歩に逐ひて高く低く至る

尋聲向背馴

聲を尋ねて向きつ背れつ馴れたり

飛疑秋雪落

飛びては秋の雪の落つるかと思ふ

(注) 集訝浪花句 集りては浪の花の匂ふかか訝る

殊恨秋天暮 殊に恨むらくは秋天の暮

相離不敢親 相離れて敢へて親しまざること

(注) ……岩波古典文学大系本では「談」となっているが、白詩との比較により「訝」の誤写ではないかとして改めてみた。その詳細な考察については以下に述べる。訓みは筆者試読。他は岩波古典文学大系本に従う。

この詩の意は「つがいの鷗の性質は静かである。ましてや心静かな人とあうと一層静かに飛ぶ。その人の歩に従って高くも低くも飛び、人の声を尋ねて、ついたり、離れたりしながら馴れ親しむものである。その鷗の飛んでいる様子はあたかも秋に白い雪が舞っているのではないかと疑いたくなるし、鷗が集っている所を見ると浪の花が咲きほこっているのかと見誤ってしまう。とりわけ残念なのは秋の夕暮れに鷗が雌雄別々になって親しみ仲むつまじくしようとしないうことである」となるのではないかと思う。

この詩の出典の考察については、川口久雄氏が、岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』の頭注、(注二)の中で梁の何遜の詩、杜甫の詩、陸龜蒙の詩等を取り挙げてある。

この事については後述するが、この詩題の「鷗」については先ず次の『列子』の故事が踏まえられていると考えられる。

海上之人、有好^下漚^上鳥者。每旦之海上、從^二漚^一鳥遊。漚鳥之至者、百住而不下。其父曰、吾聞、漚鳥皆從^レ汝遊。汝取來。吾玩之。明日之海上、漚鳥舞而不下也。故曰、至言去言、至為無為。齊智之所知、則淺矣。

(通釈)

浜べに住む男に、かもめの好きな者がいた。毎朝浜べに出て、かもめと一緒に遊びたわむれていた。そこへやって来るかもめの数はというと、百ではきかなかった。ある日、その男の父親が言うには、「話によると、かもめが皆お一緒になって遊びたわむれているというではないか。ひとつ、お前、つかまえて来てくれ。私はおもちゃにしてみたい」とのこと。ところが、翌朝、浜べに出てみると、かもめは、舞い上がったままで、一向に下りては来なかった。されば世の諺にも、「最上の言説は、ことばにたよらず、最上の行為は、拳措にうったえない」というのである。いずれにしても、常識的の範囲内だけでものごとを考えようとするならば、まことに至らぬものがあると言わざるを得ない。

(新釈漢文大系『列子』九六頁より引用)

ここで再度、道真の詩「水鷗」に目を移すと、一句目から四句目の「雙鷗天性静なり／況んや心得たる人に遇はんや／歩に逐ひて高く低く至る／聲を尋ねて向きつ背れつ馴れたり」の内容は、この『列子』の中の「漚鳥を好む者」と「漚」の関わりの故事を踏まえて句作りされていると考えて間違いない。

この『列子』の故事は、先学指摘されて久しくなる(注3)『藝文類聚』卷九十二(鳥部下・鷗)の中にも見出すことが出来る。

鷗

説文曰、鷗、水鷗也。倉頡解詁曰・鷗、鷗也。山海經曰、玄股國、其人食鷗。列子曰、海上之人好鷗者、每旦之海上、從鷗鳥遊、鷗鳥之至者、百數而不止、其父曰、吾聞鷗鳥皆從汝好、取來吾玩之、明日之海、鷗鳥舞而不下。

(傍線筆者)(注四)

ここでは道真は『藝文類聚』と『列子』のいずれを出典としたのだろうか。この「水鷗」の詩が道真の注に、「干時日廻西山、歸期漸至。含毫詠之、文不加點。不避聲病、不守格律」とある詠作事情を鵜呑みにするのは早計だとしても、速詠を強要された中で詠作された作品である事は間違いない。そういう状況の中では、やはり類書の利用価値の高かった『藝文類聚』の「鷗」の頁より詠作の素材を得たと考える方が理解しやすい。更にこの事を裏付ける事例として、『藝文類聚』巻九十二(鳥部下、鷗)の頁には更に「詩」として次のものが載せられている。

梁何遜詠白鷗詩曰

可憐雙白鷗 憐むべし 雙の白鷗

朝夕水上遊 朝に夕に水上に遊ぶ

何言異栖鳥 何ぞ言はん異栖鳥

雌住雄不留 雌は住まり雄は留まらず

孤飛出浦澱 孤り飛びて浦澱に出で

獨宿下滄洲 獨り宿りて滄洲に下る

東西從此去 東西此より去りて

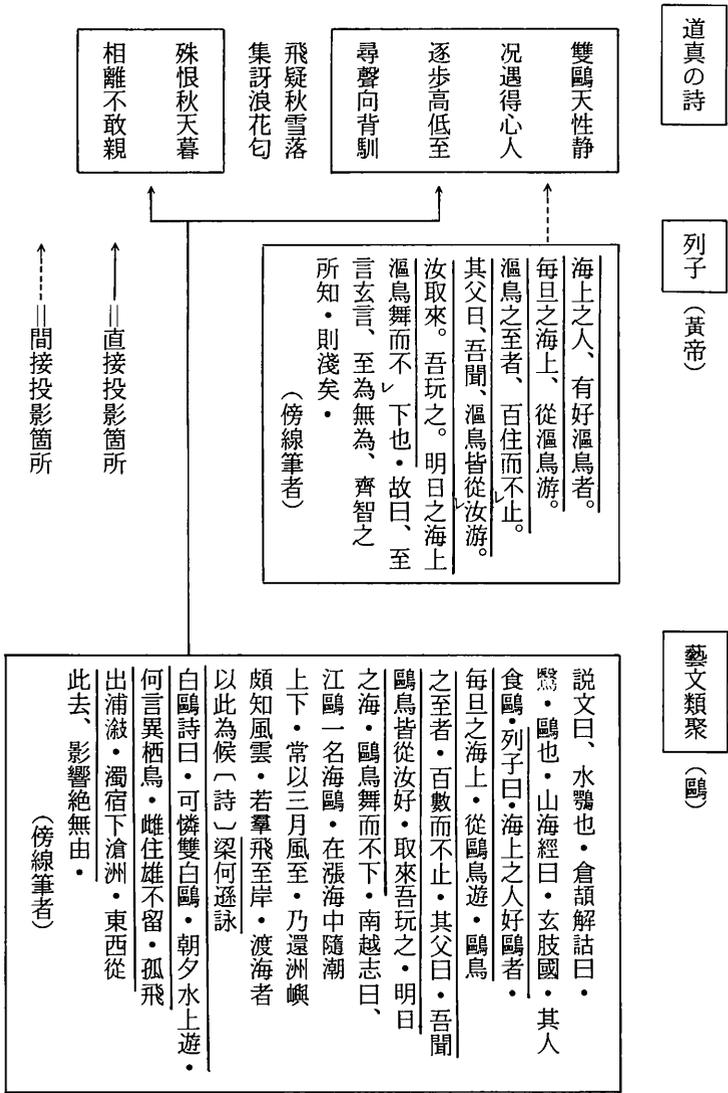
影響絶無由 影響絶えて由無し

(筆者試読)

前述の川口久雄氏の指摘にもあるように、道真の詩、第七、八句「殊恨秋天暮、相離不敢親」はこの何遜の詩内容を踏まえての句作りだと考えられる。とすれば、道真が詠作の為に『列子』の故事と何遜の詩を「白鷗」という素材収集の一

つとして個別に求めたと考えるよりも、『藝文類聚』という類書の中の「鷗」の頁より間接的に典故を求めたと考えるべきではないかと思う。

以上の事を再度整理してみると左図の様になる。



さて、ここで道真の詩の五、六句「飛疑秋雪落／集訝浪花匂」に目を移してみる。この二句は「水鷗」を「秋雪」に、また「浪花」に喩えた表現箇所だと考えられる。

こうした比喩表現が道真に限らず当時の漢詩人にも多用されている事、またその典拠を白詩に求めることができる事が小島憲之氏の著述の中で詳述されている。(注五)またこの二句の白詩からの投影の指摘は、金子彦二郎氏よりなされている。(注六)ここでは二氏の論に負いつつ、更に考察を深めてみたい。以下、この二句の典拠と思われる白詩を挙げてみる。

2624 和劉郎中望終南山秋雪 白居易

遍覽古今集

都無秋雪詩

陽春先唱後

蔭嶺未消時

草訝霜凝重

松疑鶴散遲

清光莫獨占

亦對白雲司

遍く古今の集を覽るに

都て秋雪の詩無し

陽春先づ唱へて後

蔭嶺だ消えざる時

草には霜の凝って重きかと訝り

松には鶴の散ずること遅きかと疑ふ

清光獨り占むる莫く

亦對す白雲の司

(注) 作品番号は花房英樹著『白氏文集の批判的研究』(2 総合作品表) の分類番号による。

(注) 傍線筆者

道真の詩「水鷗」が発想や措辞の大部分を『藝文類聚』に典拠を求めることができることは先に述べた通りである。ここで白詩との関わりの窺える箇所は五、六句に限られるのではないかと思う。白詩の第五、六句「草訝霜凝重／松疑鶴散遅」の比喩表現「訝：疑…」を道真は第五、六句で「飛疑秋雪落、集訝浪花匂」として応用していると思われる。白詩のこの二句は終南山の秋雪を「草に降りかかっている雲はまるで霜が凝っているかのように見え、松に降りかかっている雪の様子は、またそこに白鶴が群れているかと疑われる」のように喩えた表現である。一方、道真のこの二句は、鷗を「飛んでいる様は、あたかも秋に雪が降っているのではと疑われ、群れ集っている様子は、さながら浪の花が咲き匂っているのかとあやまたれる」と喩えた表現である。比喩の対象が白詩では「雪」であり、道真の詩では「鷗」といった異質のものである。詩題にも二詩には共通性は見出せない。

このことは道真が白詩の第五・六句の比喩表現、言い換えるならば「訝：疑…」の表現技巧だけを撰取、応用しているといった狭視的な白詩の利用をしている事を示唆しているのではあるまいか。この道真の詩が前述の白詩の第五・六句に拠っているという根拠は、詩題、詩内容に共通性を見出せないため説得力に欠くが、この詩が「晩秋二十詠」の一首であること、道真が第五句で「鷗」を取って「秋雪」と比喩している等は、やはり白詩「和劉郎中望終南山秋雪」となにかの関わりがあることを暗示しているように思える。つまり「鷗」の詩を詠作する道真の脳裏には、この白詩の「秋雪」の比喩表現が記憶されていたものと思われるのである。この白詩との関わりの深さは更に道真の晩年の詩「東山小雪」(『菅家後集』)の中で、第三・四句「誤雲獨宿碯／疑鶴未歸田」と「誤：疑…」の比喩表現のみならず「雪」を「鶴」と看做す発想を、この白詩五句に求めていることを実証する句作りが存在することでも窺い知ることが出来るのである。

ところで岩波古典大系本では第六句は「集談浪花匂」となっており、川口久雄氏は頭注で「鷗が群れ集って水の上にかんできると浪の花が咲きにおっているようだ」と語り合う(『岩波古典文学大系『菅家後集』(三三八頁)と解釈されているようだが、「談」の字の語意が不可解である。前述したようにこの詩は「晩秋二十詠」の二首でこの二十首の中には

平仄を踏みはずしたものもあると道真自らが注している。(注一)

しかしこの詩に限って言えば、正確に韻は押さえられているようである。再度道真の詩と平仄の表を次に示してみる。

雙鷗天性静	○	○	○	●	●	●
况遇得心人	●	●	●	○	○	○
逐歩高低至	●	●	○	○	○	●
尋聲向背馴	○	○	●	●	●	○
飛疑秋雪落	○	○	○	○	●	●
集 誚 浪花句 談	●	○	○	○	○	○
殊恨秋天暮	○	●	○	○	○	●
相離不敢親	●	○	○	●	●	○

* (注) …… 仄韻 ○ …… 平韻 (…… 対句)

近体詩の形態であるこの詩で対句となるべき三・四句、五・六句の二聯に的を絞り考察をしてみる。

語句の対では三・四句の「逐歩」と「尋聲」、「高低」と「向背」、「至」と「馴」。五・六句の「飛」と「集」、「疑」と「談」か「誚」、「秋雪」と「浪花」、「落」と「句」とが考えられる。ここで「疑」と「談」を対字とするのはやはり意味の上からも無理がある。それを「誚(いぶかる)」とすれば同表現の対として合点がゆく。勿論、速詠を強いられるといった詠作事情を考慮すれば多少表現に無理があることも十分予想される。しかし韻に目を移すと、前記のように平

仄においても明らかに対をなしていることが判明する。「談」は平韻であり、「訝」は仄韻である。「疑」が平韻であるならば、対となるべき字は仄韻のはずである。道真がこの一字だけ韻において対を無視したと考えるのは不自然のように思える。ここでは正確に仄韻の「訝」を使っていたと考えられる。故に岩波古典文学大系本の本文には従い難い。句意も「鷗が群れ集まっている様はあたかも浪の花が咲き匂っているかのようだ」と考えるべきではなからうか。

以上、第六句の「談」が「訝」の誤写ではないかとする根拠を、語意、韻の二点から考察してみても明らかにできたと思つ。

この「談」が「訝」と考える前提に白詩の表現の撰取があったことは前述の通りである。言い換えるならば、白詩「和劉郎中望終南山秋雪」の第五・六句の比喻表現が道真に記憶され、句作りに応用されているとすれば「談」

ではなく「訝」となっていたはずである。白詩の、この比喻表現「疑……疑……」は道真のこの詩以外にも次の例が指摘できる。

初疑碧落留飛電 / 漸談炎洲颺暴風

(『普家文章』卷一 賦得赤虹篇、一首)

この二句は「赤い虹」を喩えた対句表現の箇所であるが前の「水鷗」でも考察したように、「談」の字は「訝」の誤写であろうと思われる。この二句に限って韻を示すと

○ □ ● ○ ○ ● / □ ○ ○ ● ○

となり「談」では韻の上からも「疑」と対をなさない。「訝」ならば全対になり、句意、韻の上からも無理がなくなる。

勿論、この句については更に内容の考察を深めて結論を導く必要があるがやや本論の主旨からはずれるようなので、ここでは提起に留めておきたい。

これらのことから考えられることは、道真が白詩のある表現（ここでは比喻表現）を撰取し、白詩の詩意とは関わりの薄い表現技巧の一つとして狭視的撰取をしたものが血肉化され、道真自身の表現技巧のある常套句として応用されていたことを物語っているのではあるまいか。

また一方で、前述したように道真の句作りの措辞として白詩以外に、それと同次元で他の漢籍（ここでは、類書『芸文類聚』を直接の典故とする、『列子』、何遜の詩からの間接投影）より求め利用している事実が、わずか一首の詩の考察で即断するのは早計すぎるが、多少なりとも実証できたと思う。

（注一）「晚秋二十詠」としてその自注に

九月廿六日、隨阿州平刺史、到河西之小庄。數盃之後、清談之間、令多進
 士題二十事。于時日廻西山、歸期漸至。含毫詠之、文不加點。不避聲病、
 不守格律、但恐世人嘲弄斯文。恐之思之、才之拙也。

（傍線筆者）

とある。川口久雄氏の補注に「注は仁和元年（八八五）九月二十六日、阿波守平氏某にしたがって、鴨河の西（鳥羽の西、

乙馴群の地、桂・久我のあたりか)、水辺の小別荘に行き、置酒清談、文章生の多氏の某に二十事を題を出させ、詠物詩を賦せといわれる。もう日も傾き、帰る時刻も迫っていたが、私は筆の穂先を口に含みながらどんどん作って行った。作ればなしで、詩に点は一切ささず、平仄をととのえ声病を去り嫌うというきまりも顧慮せず、またきびしい格律の法則も守らず、速詠を試みたのであるの意。一般の批評を恐れるとはいいいながら、速詠に対する彼の自信のほどがややうかがわれる。

(『菅家文章・菅家後集』日本古典文学大系八七六―八七九頁)

(注二)『菅家文章・菅家後集』日本古典文学大系二三八頁

(注三)菅見の中では、金原理先生の「延喜前後の漢詩人の

方法―嶋田忠臣の場合―」の中で『藝文類聚』と平安

朝漢詩人との関わりが詳述されている。(『平安朝漢詩

文の研究』一四一頁―一六三頁)

(注四)『藝文類聚』上・下 中華書局出版の活字本による。

(注五)『古今集以前』小島憲之著の中の「三『新撰万葉集』

の詩と歌―(二)比喩的表現―(二五八頁―二七八頁)に

詳述されている。特に道真の詩に言及されているのは

二六三頁―二六四頁である。

(注六)『平安時代文學研究篇第二冊』金子彦二郎著三三六頁

一九八七年五月二十八日執筆

(福岡県立三瀬高等学校勤務)

学会員近著紹介

このたび、徳野伊勅氏(七回生)が愛新感羅・烏拉熙春編著『満語語法』の翻訳を出版された。中国語・満州語の学習成果を踏まえたA五判四一七頁に及ぶ大作である。その後書きによれば日本語成立に関わる言語としての満州語に興味を触発されての事と云う。深く敬意を表すと共に、ますますの御発展を祈り申しあげる。